とある街にて停泊中の
グランサイファー

『みんな各々街を見てまわってるし
ボクはお昼寝でもしてようかな』

『こんにちはお嬢ちゃん』

『う？』

『お嬢ちゃん、騎空団の人でしょう？』

『ふぇ？　そうだよ』

『やっぱりそうだ
今キャンペーン中でね
お疲れの騎空団の人たちに
マッサージをして回ってるんだ』

『マッサージ？
え、でもボク
お金ないよ』

『ハハハ、大丈夫
初回はお試しということで
無料なんだよ』

『そーっかぁ、それなら
時間あるしちょっとだけ……』

『マッサージはどうかな？』
『んっ……えと、こういうのはじめてだからボクよくわからない……な……ちょっとだけ気持ちよくなってきた、かも……』
びくんっ♡
ハッ♡ハッ♡
ハッ♡ハッ♡
ぴくんっ♡
『長い旅できっとこってるんだろうね慣れてくるともっと気持ちよくなるからね』
『うっ…うん』
ピチュッ♡
ピチュッ♡
ピチュッ♡
ピチュッ♡

『よぉし、仕上げだ』
『えうぅッ……!!』
『うっ……なんかっ
ドクンッドクンッってしてるぅ』

『おほ〜〜❤
たっぷり射精たぁ〜〜
気持ちよかった？』
『う、うん、気持ちよかった？
のかな……
おまたが変、なんか出てる……』
『これはマッサージがよく効く
おくすりみたいなものだよ
いっぱい塗り込んでおこうね』
ホッレ
ホッレ
フッレ
フーッレ
どくんっ
どくんっ
『また来たかったら
次からは500ルピ持ってきてね』
『え、あ、うん……』
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
ぎくぎく
ぎくぎく
どろ〜っ

その夜――

昼間の感覚が忘れられず
それが自慰行為とも知らずに
ひとりエッチを繰り返していた

『どうしよう
どうしよう……おまた
擦るの止まんないよ……
ボク、おかしくなっちゃったのかな……』

『何回やっても足りない……』

『自分のマッサージじゃだめ……
明日も……い、いこうかな……
お金、あったっけ…』

ぬぷぷ…ぐ

あ…♡

『いやぁまさか
本当に来てくれるとはねぇ』

とんとん
とんとんとん
とんとんとん
とん

れ〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ〜
もちイイ〜もちイイ〜もちイイ〜
きもちイイ〜きもちイイ〜きもちイイ〜
大きイ〜大きイ〜大きイ〜
もっと〜もっと〜もっと〜

『な、なんか……
あれからずっと
おまたが変で……
自分のマッサージじゃ
全然ったりなくて……』

『よし、そろそろ
仕上げだよッ!!』

パンッパンッパンッパンッ

ビクッビクッビクッビクッ

『あ、あの……今日、
もう一回マッサージいいですか』

どぽぽぉ…

『ほんとは追加料金
なんだけど特別だよ?』

『それから数日、我慢ができない時は
マッサージに通う日々が続いていた』

お金が足りず、団の資金に
手を付けてしまうことも少なくない
そんな生活が2週間を
過ぎようとしていたある日

はっ はっ はっ はっ はっ はっ

むはぁ…

びゅるっ♡ びゅるっ♡

ビクッ ビクッ ビクッ

びゅっ びゅっ

『お、おじさん……
ちょっと相談があるんだけど』

『どうしたんだい？』

『ボク、もうそろそろこの島を
出なくちゃいけないみたいで……』

『あらら、残念だねせっかく
マッサージにも慣れてきたのにね』

『そ、そうなんだよね……』

フーッ フーッ フーッ フーッ

『まぁまた立ち寄った時にでも
我慢できないようだったら来たらいいよ』

びくっ びくっ びくっ びくっ

くちゅ ぷちゅ ぬちゅ

『う、うん……
（やだやだ、もっと
マッサージしたい……）』